

生涯学習におけるテレビ利用態度 と視聴能力について

住 岡 英 毅

(滋賀大学)

はじめに

テレビが学習の媒体になり始めてから、すでに久しい。それは、今や、生涯学習の有力な手段の一つである。語学番組や教養番組を利用して、家庭の茶の間で継続的に学習を進める。そういう、いわゆる自発的な「個人学習者」は、年々、着実に増えている。いや、そればかりか、今ではそのような人たちが集まり、学級や講座、あるいは自主グループをつくって学ぶ試みも、社会教育の分野で大へん盛んである。⁽¹⁾

このような動きのなかで、テレビと生涯学習に関する研究も、その成果が少しずつ蓄積されてきている。それは、テレビを利用した生涯学習の実態や効果に関する実証的研究から始まって、テレビの特性をふまえた学習方法の展開に関する研究、さらには、それを学習集団づくりの視点から追求するといった、どちらかと言えば実践的な関心に強く支えられた研究に至るまで、じつに様々な方向からなされてきている。

ところで、生涯学習におけるテレビへの関心がこれ程高いにもかかわらず、「成人のテレビ視聴能力」については、これまであまり論議されてこなかったように思われる。一般に、テレビは映像であるためわかり易い、と言われる。だが、本当にそうだろうか。言うまでもなく、映像は、活字にくらべてはるかに多様な内容を内に含んでいる。一つ一つの映像（カット、シーン）を論理的につなぐ接続詞も、明示されている訳ではない。⁽²⁾ しかも、それは、一過性という制約の中にある。したがって、個々の学習者は、そうしたテレビ映像のなかから、瞬時に何を選択し、どのようにそれをつなぎ、読み取るかという、いわば視聴能力をたえず

問われることになる。だが、テレビで学ぶ成人のすべてが、そのような視聴能力を身につけているかという点、少なからず不安が残るのではないかとすれば、成人のテレビ利用学習が盛んになればなる程、彼らの視聴能力をどう評価し育てるかという問題が、まさに社会教育の緊急の課題として浮かび上がってくるはずである。にもかかわらず、この点についての論究は、今のところ、実践的にも理論的にも、ともに不十分であると言わざるをえない。

小論は、このような問題意識から、成人のテレビ視聴能力を高める要因の一端を、日常のテレビ利用態度との関連で、実証的に明らかにすることを目的としている。とりわけ、ここでは、テレビで学ぶ典型的な五つの学習グループを取り上げ、そのグループ間比較を試みることによって、視聴能力のありかを多角的に探ってみることにしたい。こうした考察を通して、成人のテレビ視聴能力の育成にかかわる、いわば戦略的なヒントを抽出することができると考えるからである。

1. テレビ視聴能力の評価

(一) 視聴能力の測定尺度

成人のテレビ視聴能力を高める要因を探るためには、まず、彼らの視聴能力を的確に把握することから始めなければならない。

では、われわれは、成人の視聴能力をどのような方法で知ることができるか。学習グループが保存している「学習会の記録」や、個々の学習者の「視聴ノート」をつぶさに検討すれば、ある程度の実態をつかむことは可能であろう。そこには、テレビの内容が意図している事柄と学習者の理解度とのずれや一致が、多少なりとも表現されているからである。また、もっと直接的には、視聴後の話し合いにおける、彼らの発言内容の分析を通して、視聴能力のおおよその輪かくをつかむこともできる。テレビ情報の独断的解釈や見落としなどをチェックすることによって、である。だが、こうした方法は、それぞれ固有の価値はもっているものの、必ずしも万全ではない。「学習会の記録」や「視聴ノート」に書かれていないこと、また話し合いのなかで具体的な発言として表現されない部分については、まったくお手上げであるからである。それに、評価者の独断や誤解が入りこむ余地もあり、視聴能力の客観的把握という点でも弱さをもっている。

では、こうした言わば質的データに基く評価の短所を、われわれはどう補ったらいいか。それには、計量的な得点として記述可能な、しかもある一定水準の客観性を有する、測定尺度を用いての評価が有効であろう。もちろん、計量的な評

価にもそれなりの限界はあり、そのみに頼ることは危険であるが、上記質的データの分析による評価と相互に補完しあうやり方で活用すれば、測定尺度はきわめて有効な力を発揮するはずである。この点では、高旗正人と千原孝司が小・中学生用に作成した「テレビ視聴能力の測定尺度」⁽⁶⁾は、成人の視聴能力を測る上でも、ひとつの目安として大いに参考になる。

二人は、水越敏行による「テレビ視聴能力の構成要素に関する理論的検討」⁽⁷⁾、および押野市男による「視聴能力形成のための領域と視点」⁽⁸⁾などを参考にしつつ、視聴能力を測る32の質問項目を作成した。さらに、小・中学生800人を対象に調査をおこない、因子分析をおこなって、最終的に4つの因子からなる15の質問項目を確定している。第1表に示したものが、それである。ここで、項目番号の1, 2, 7, 12, 14, 15が「構造的理解因子」、6, 10, 11, 13が「表現性因子」、4, 5, 8が「学習意欲因子」、3と9が「番組批判的因子」である。これら15の項目には、それぞれ、「強くそう思う（5点）」、「そう思う（4点）」、「どちらともいえない（3点）」、「そうは思わない（2点）」、「全くそうは思わない（1点）」という5つの選択肢（得点）が付けられている。すなわち、視聴したテレビ番組について各項目のいずれかに○印をつけ、その総得点が高い程、視聴能力が高いという訳である。

この尺度の難点は、各因子の項目数に偏りがあることである。また、尺度の妥当性についても、いくつかの検討課題が残されている⁽⁹⁾。だが、どのような番組であっても回答できるような質問になっていること、また、多くの発達段階の子どもたちが回答できる内容のものであることなど、簡便な測定尺度としてとてもよくできている。そして、この点で、成人の視聴能力をはかるものさしとしても、それは十分通用すると言ってよいであろう。

そこで、小論では、この測定尺度を用いて、成人のテレビ視聴能力の評価を以下のように試みた。

（二）視聴能力のグループ間比較

視聴能力の評価は、成人学習者の一人ひとりについておこなうこともできるが、学習グループ全体についてもおこなうことができる。ある学習グループが到達している視聴能力の程度が、他の学習グループのそれと比較して相対的に高いか低い。そういうグループ間比較である。このグループ間比較による評価には、次のようなメリットがある。すなわち、ある学習グループの視聴能力が他のグループのそれと比べて高い（または低い）とすれば、その原因はどこにあるか。学習グループの運営や学習方法が、視聴能力の高低に響いてはいないか。このような

第1表 視聴能力の測定尺度

	強く そう思う	そう 思う	どちら でもない	そうは 思わない	全く そうは 思わない
例, あなたは, 夏が好きですか……………	5	④	3	2	1
(1) あなたは, 今のテレビを見ていて, 画面のま とまりをみつけだすことができましたか……………	5	4	3	2	1
(2) あなたは, 今見たテレビの内容をいくつか にくぎって説明できると思いますか……………	5	4	3	2	1
(3) あなたは, 今のテレビを見て, 場面がはやく かわりすぎるので, わかりにくかったですか……………	5	4	3	2	1
(4) あなたは, 次の時間のテレビをはやく見たい と思いますか……………	5	4	3	2	1
(5) あなたは, 今のテレビを見て, そのつづきの 番組があればみたいと思いますか……………	5	4	3	2	1
(6) あなたは, 今のテレビを見ながらともだちに たずねてみたいことがありましたか……………	5	4	3	2	1
(7) あなたは, 今のテレビを見ていて, 場面のか わりめをみつけることができたと思いますか……………	5	4	3	2	1
(8) あなたは, 今のテレビを見て, 時間のたつの が早かったと思いましたか……………	5	4	3	2	1
(9) あなたは, 今のテレビを見て説明がはっきり しなかったの, わかりにくいと思いましたか……………	5	4	3	2	1
(10) あなたは, 今のテレビを見たあと, 印象に残 ったことをメモしたり, 絵にかいておきたいと 思いましたか……………	5	4	3	2	1
(11) あなたは, 今のテレビを見ながら, ひとりで 何かやってみようと思いましたか……………	5	4	3	2	1
(12) あなたは, 今のテレビを見ていて, 画面のま とまりにそれぞれ名前をつけることができた と思いますか……………	5	4	3	2	1
(13) あなたは, 今のテレビを見たあと, テレビの やり方をまねてみたいと思いましたか……………	5	4	3	2	1
(14) あなたは, 今のテレビの中心になっている内 容がいええますか……………	5	4	3	2	1
(15) あなたは, 今のテレビを見ていて, 番組のね らいがわかりましたか……………	5	4	3	2	1

観点から、両グループの視聴能力の実態と学習活動の実態とをクロスして考察することで、視聴能力を高める要因の一端を探ることができる。

第2表は、筆者が、昭和60年12月に、五つの学習グループ、112名を対象に、先の測定尺度を用いて実施した、視聴能力テストの結果である。共通の番組(VTR)を集団視聴させた後で、このテストを実施した。番組名は、NHK「中学生日記」(“さよならのノート”, 昭和60年11月24日放送)である。なお、五つの学習グループ(A~E)のおおよそのプロフィールは、次のようになっている。

(A グループ)

すべてが女性。30歳代7人、40歳代2人、50歳代1人。ある幼稚園のPTA会員。園の呼びかけで(放送教育研究の一環として)NHK 幼児番組「みんなのせかい」を継続視聴している。視聴ノートの取り方、疑問点や感想などをメモして学習会に持ち寄ること、家庭ではできるだけ番組を話題にして子どもと話し合うこと、さらにグループ学習の進め方など、園の指導がゆきとどいている。この点で、テレビを利用しての学習には十分に慣れている。しかし、社会教育の放送利用学習グループの経験者は1人しかない⁽¹⁰⁾。

(B グループ)

すべてが女性。30歳代26人、40歳代1人。全員が放送利用学習グループの未経験者である。本研究の比較群として集まっていた人たちである。したがって、このグループは、厳密には、テレビ利用の学習グループとは言えない。

(C グループ)

女性19人、男性4人。30歳代4人、40歳代8人、50歳代1人、60歳代10人。すべて社会教育の放送利用学習グループのメンバーである。3年以上の経験者が10人いるものの、残り半数以上は、放送利用学習の経験は浅い。また、これまで学習グループの未経験者である新入会員も4人含まれている。比較的に高齢者が多いのも、このグループの特色の一つである。

(D グループ)

女性31人、男性1人。30歳代7人、40歳代17人、50歳代5人、60歳代2人。すべて社会教育の放送利用グループのメンバーである。グループの歴史は比較的短かく、このため学習グループ経験2年以内の者がほとんどである。また、これまで学習グループ未経験者である新入会員も8人含まれている。

(E グループ)

女性19人、男性1人。20歳代1人、30歳代7人、40歳代11人、50歳代1人。すべて社会教育の放送利用グループのメンバーである。学習グループの歴史は

210 自由投稿

長く、10年以上経過している。このため、学習グループ経験5年以上の者が半数を占める。学習活動は、話し合い、見学、研修会への参加、町の社会教育事業への参加など多彩で活発である。これまで学習グループ未経験者である新入会員も3人含まれている。

第2表 グループ別にみた視聴能力

① 総 合

グループ 評価値	A				B			C			D			E		
	参 加	不 参 加	計		参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計
評価 1																
2		1	1			8	8	6	3	9	4	1	5	1		1
3	1	7	8			19	19	11	1	12	20	7	27	14	2	16
4		1	1					2		2				2	1	3
5																
合計人数	1	9	10			27	27	19	4	23	24	8	32	17	3	20
平均評価	3.00	3.00	3.00			2.70	2.70	2.79	2.25	2.70	2.83	2.88	2.84	3.06	3.33	3.10

② 構造的理解因子

グループ 評価値	A				B			C			D			E		
	参 加	不 参 加	計		参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計
評価 1																
2						1	1	1		1	1		1	1		1
3		2	2			14	14	13	4	17	19	5	24	10	1	11
4	1	7	8			12	12	5		5	4	3	7	6	2	8
5																
合計人数	1	9	10			27	27	19	4	23	24	8	32	17	3	20
平均評価	4.00	3.78	3.80			3.41	3.41	3.21	3.00	3.17	3.13	3.38	3.19	3.29	3.67	3.35

さて、結果の考察に移る。まず、第2表の①に注目してみたい。これは、視聴能力の総合的評価をグループ別にまとめたものである。つまり、それは、先の15の質問項目全体で測られた、言い換えれば、4つの因子すべての視聴能力を総合したトータルな視聴能力の評価をまとめたものである。表中、「評価値」とは、質問項目に対する回答から得られた得点を示す。ここでは、便宜的に、総得点を15で除し、小数点以下を四捨五入してこれをもとめた。「参加」「不参加」とは、これまで学習グループに参加して学習を進めた経験があるか否かを示す。したがって、表の読み方は、たとえばAグループについて言えば、学習グループ参加経験

生涯学習におけるテレビ利用態度と視聴能力について 211

③ 表現性因子

グループ 評定値 参加	A			B			C			D			E		
	参加	不参加	計	参加	不参加	計	参加	不参加	計	参加	不参加	計	参加	不参加	計
評定 1		1	1		4	4	2	1	3	2	1	3			
2		3	3		17	17	8	2	10	11	4	15	4		4
3	1	4	5		6	6	9	1	10	10	2	12	11	1	12
4		1	1							1	1	2	2	1	3
5														1	1
合計人数	1	9	10		27	27	19	4	23	24	8	32	17	3	20
平均評定	3.00	2.56	2.60		2.07	2.07	2.37	2.00	2.30	2.42	2.38	2.41	2.88	4.00	3.05

④ 学習意欲因子

グループ 評定値 参加	A			B			C			D			E		
	参加	不参加	計	参加	不参加	計	参加	不参加	計	参加	不参加	計	参加	不参加	計
評定 1					3	3									
2		1	1		6	6	4	2	6	5	3	8		1	1
3	1	4	5		14	14	12	2	14	10	1	11	7		7
4		3	3		3	3	3		3	8	4	12	9	1	10
5		1	1		1	1				1		1	1	1	2
合計人数	1	9	10		27	27	19	4	23	24	8	32	17	3	20
平均評定	3.00	3.40	3.40		2.74	2.74	2.95	2.50	2.87	3.21	3.13	3.19	3.65	3.67	3.65

⑤ 番組批判的視聴因子

グループ 評定値 参加	A			B			C			D			E		
	参加	不参加	計	参加	不参加	計	参加	不参加	計	参加	不参加	計	参加	不参加	計
評定 1		4	4		10	10	1		1	6		6	5	1	6
2	1	4	5		13	13	3	3	6	11	4	15	6	2	8
3					3	3	7	1	8	5	4	9	4		4
4		1	1		1	1	5		5	2		2	2		2
5							3		3						
合計人数	1	9	10		27	27	19	4	23	24	8	32	17	3	20
平均評定	2.00	1.78	1.80		1.81	1.81	3.32	2.25	3.13	2.13	2.50	2.22	2.18	1.67	2.10

者が1人、未経験者が9人いる。そのうち、評定値2の者が1人、3の者が8人、4の者が1人いる。そこで、グループ全体の評定値は3.00ということになる。

興味深い結果が出ている。まず、Eグループの平均評定値が最も高く(3.10)、次いでAグループ(3.00)、Dグループ(2.84)の順となっており、Bグループと

Cグループの平均評定値(2.70)が最も低い。すなわち、学習グループの歴史が長く、多彩で活発な学習活動を展開しているEグループと、TV視聴に関してきめ細かな指導を集中的に受けているAグループの視聴能力が高い。逆に、これとは対照的に、テレビ利用の学習グループとは異なるBグループ(比較群)は、視聴能力が低い。比較的歴史が短いDグループは、これらの中間に位置している。Cグループは、学習グループ経験3年以上の者が10人含まれているにもかかわらず、視聴能力はBグループとともに低い。このCグループの視聴能力の低さを説明する要因は、今後さらにグループの内部に立ち入って探ってみる必要がある。が、⁽¹²⁾ともかくも、おおよその傾向としては、以上から、成人の視聴能力は学習グループにおける学習活動の密度(グループの歴史の長さや学習活動の多彩さなど)と深い関連があると言ってよいであろう。

次に、第2表の②～⑥は、こうした学習グループの視聴能力を、各因子別にみたものである。総合的評価において高いEグループとAグループは、とりわけ「表現性因子」と「学習意欲因子」において視聴能力が高い。逆に、BグループとCグループは、この二つの因子においては、ともに視聴能力が低い。このことから、学習グループにおける学習活動の密度は、「表現性因子」および「学習意欲因子」と、とりわけ深い関連がありそうだ。

その他、「構造的理解因子」では、Aグループの視聴能力が最も高いものの、比較群であるBグループも、それに次いで高い。また、「番組批判的視聴因子」では、Cグループの視聴能力が最も高く、Aグループの視聴能力が最も低い。つまり、この二つの因子からみた視聴能力は、学習グループにおける学習活動の密度とそれほど深い関連がないように思われる。

では、視聴能力を高めるもっと直接的な要因はなにか。それを、学習者の日常のテレビ利用態度との関連で探るのが、われわれの次の課題である。

2. テレビ利用態度の評価

(一) 利用態度の測定尺度

一般に、グループで学習を進めると、テレビの見方がずいぶん変わってくる。端的に、テレビを見る目が複眼的になる。よく言われることだが、われわれは、往々にして、テレビを自己流に見がちである。すなわち、自分の興味や関心、あるいは長年月⁽¹³⁾にわたって培ってきた価値観などのフィルターを通して、テレビを見る傾向が強い。そのため、大切な情報を見落したり、解釈が独断に陥ったりす

ることが多い。だが、グループで学習を重ねていくにつれて、個々の学習者は、他者（学習仲間）の目と自分の目との両面からテレビを見るようになる。つまり、多面的な情報解釈をおこなうようになる。こうして、テレビを見る目がいつの間にか複眼的になる、というわけである。

さて、こうした複眼的視聴態度を含む、その他様々なテレビ利用の態度は、その視聴能力の行方を大きく左右するのではないか。あくまでも仮説であるが、成人の視聴能力を高めるテレビ利用態度は、次の5つの領域で説明することができるように思われる。

1. 学習媒体志向
2. 視聴前の能動性
3. 旺盛な学習活動志向
4. 視聴後の応用志向
5. 視聴中の能動性

の5つである。

1は、生活のなかで、テレビを単なる娯楽の媒体としてだけでなく、書物と同様に学習の媒体として位置づけ活用しようとする態度を指している。つまり、知識や技術を得るための手段として、テレビに注目する態度である。

2は、テレビ視聴前においてすでに、番組に対する能動的な構えができていることを意味している。たとえば、番組に対していつも選択的にかかわる態度、また、他の生活行動との調整をはかりつつ、あらかじめ視聴番組の予定を立てようとする態度などが、これにあたる。

3は、テレビ視聴中、または視聴後において、大切な事柄をメモに残したり、他の媒体を利用してさらに学習内容を深めたりするといったふうに、多彩で活発な学習活動をいとわない態度である。

4は、テレビ視聴後に、学んだことを生活のなかで試したり、それを他者に広げたりする態度である。

5は、テレビ視聴中において、番組をどちらかと言えば分析的、批判的に見ようとする態度である。内容の真偽に疑問を抱いたり、その偏りや誇張に気をつける態度などがこれにあたる。

以上5つの態度は、かんたんに言って、「テレビ視聴に向けられた積極的な構え」と呼ぶことができる。そして、こうした「構え」こそ、学習者をテレビにより鋭く結びつけ、そのことがひいては、彼らの視聴能力を高める大きな要因の一つとなるのではないか。

第3表は、この5つの領域の態度を、それぞれ具体的に測定しうる尺度に構成

第3表 テレビ利用態度の測定尺度

	5	4	3	2	1
例、あなたはクイズ番組が好きですか……………	5	④	3	2	1
(1) あなたは、テレビを利用して、できるだけ自分に必要な知識や技術を得ようと心がけている方ですか〔1〕……………	5	4	3	2	1
(2) あなたは、教育・教養番組を、よく視聴する方ですか〔1〕……………	5	4	3	2	1
(3) あなたは、なにか特定の教育・教養番組を継続して視聴しようとする方ですか〔1〕……………	5	4	3	2	1
(4) あなたは、あらかじめ番組のめぼしをつけておいて、テレビを見る方ですか〔2〕……………	5	4	3	2	1
(5) あなたは、番組の放送予定を早目に知り、それにあわせて視聴予定を立てる方ですか〔2〕…	5	4	3	2	1
(6) あなたは、テレビを見ながら、後日のためにメモをとることがある方ですか〔3〕……………	5	4	3	2	1
(7) あなたは、テレビを見るとき、あらかじめ自分の知りたいことを期待したり、番組内容の予想をたてる方ですか〔3〕……………	5	4	3	2	1
(8) あなたは、テレビを見ながら、なんらかの疑問が生じたり、新しい興味が浮かんだとき、さらに本で調べたり、他の人にたずねたりして、それを補うことがある方ですか〔3〕……………	5	4	3	2	1
(9) あなたは、テレビから、なんらかの情報を得ようとするとき、関連番組をできるだけ探して見ようとする方ですか〔3〕……………	5	4	3	2	1
10 あなたは、テレビから得た知識や技術を、生活のなかで実際にためてみる方がありますか〔4〕……………	5	4	3	2	1
11 あなたは、テレビから得た知識や技術を、家族や友だちなど、他の人に話す方ですか〔4〕…	5	4	3	2	1
12 あなたは、テレビの内容を、自分の体験や生活にひきつけて考えたり、解釈したりする方ですか〔4〕……………	5	4	3	2	1
13 あなたは、テレビの内容を、他の人から聞いた話や読んだ本や新聞の内容と比較しながら考えたり、解釈したりする方ですか〔5〕……………	5	4	3	2	1
14 あなたは、テレビを見ながら、その内容の真偽に疑問をもつことがある方ですか〔5〕……………	5	4	3	2	1
15 あなたは、テレビを見ながら、その表現の仕方に偏りや誇張があることに気がつく方ですか〔5〕……………	5	4	3	2	1
16 あなたは、テレビを見ながら、カメラの技法や芸術的表現に感心することがある方ですか〔5〕…	5	4	3	2	1
17 あなたは、テレビを見ながら「これはどのようにして撮影したのだろう」と、番組のつくられ方に関心をもつことがある方ですか〔5〕……………	5	4	3	2	1

し直したものである。質問の後に付した〔 〕内の番号は、5つの領域番号を指している。選択肢は、視聴能力の測定尺度の場合と同様、質問に対する肯定（否定）の度合いを5段階で示したもの。それぞれに一定の得点を与えてある。すなわち、「そうである（5点）」、「どちらかといえばそうである（4点）」、「どちらともいえない（3点）」、「どちらかといえばそうでない（2点）」、「そうではない（1点）」、といったように。こうして、回答から得られた総得点が高い程、テレビ利用態度が積極的である、というわけである。

この尺度は、因子分析などの厳密な統計的処理を施して作成した尺度ではない。仮説にそって、アプリオリに尺度を構成したわけで、その点ではあくまでも便宜的なものである。だが、成人のテレビ利用態度の積極性を知るおおまかな目安として、十分に利用可能であると思われる。そこで、次に、この尺度を用いて、先の5つの学習グループを対象におこなったテレビ利用態度の測定結果について考察してみよう。第4表がそれである。

（二）利用態度のグループ間比較

まず、第4表の①、テレビ利用態度の総合的評価、つまり17の質問項目全体で測ったトータルな評価、に注目してみたい。表の読み方は、先の視聴能力テスト（第2表①～⑤）の場合とまったく同じである。

平均評定値が最も高いのは、Aグループ、次いでCグループ、Eグループ、Dグループの順で、Bグループは平均評定値が最も低い。つまり、視聴能力の高かったAグループとEグループは、テレビ利用態度が積極的であり、視聴能力の低かったBグループは、テレビ利用態度も積極的でない。このことから、視聴能力とテレビ利用態度の積極性とは深い関係があることがわかる。もっとも、Cグループは、視聴能力は低かったがテレビ利用態度は積極的である。この例外の解釈は困難だが、この点については、先にも述べたように、Cグループの視聴能力の低さになんらかの要因が働いているとみるべきではないか。とすれば、一応の傾向として、視聴能力とテレビ利用態度との相関を指摘することも、それほど的是はずれではないように思われる。

第4表の②～⑥は、そのテレビ利用態度を領域別にみたものである。Aグループは、5つのいずれの領域においても、積極性を示している。Bグループは、「視聴前の能動性」において積極的であるが、他の4領域においてすべて下位にランクされる。視聴能力の高かったEグループは、「視聴前の能動性」において最下位にランクされるものの、他の4領域においてはすべてAグループ、Cグループに次いで積極的である。学習グループの歴史も短かく視聴能力の低いDグループは、

第4表 グループ別にみたテレビ利用態度

① 総 合

グループ 評 定 値	A			B			C			D			E		
	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計
評 定 1							1		1						
2					5	5		2	2	5	2	7	1	1	2
3		5	5		20	20	8	2	10	13	6	19	14		14
4	1	4	5		2	2	9		9	6		6	2	2	4
5							1		1						
合計人数	1	9	10		27	27	19	4	23	24	8	32	17	3	20
平均評定	4.00	3.44	3.50		2.89	2.89	3.47	2.50	3.30	3.04	2.75	2.97	3.06	3.33	3.10

② 学習媒体志向

グループ 評 定 値	A			B			C			D			E		
	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計
評 定 1					1	1									
2		1	1		9	9	1	2	3	2	3	5	2		2
3		4	4		14	14	3	2	5	12	4	16	9	1	10
4	1	3	4		3	3	12		12	6	1	7	5	2	7
5		1	1				3		3	4		4	1		1
合計人数	1	9	10		27	27	19	4	23	24	8	32	17	3	20
平均評定	4.00	3.44	3.50		2.70	2.70	3.89	2.50	3.65	3.50	2.75	3.31	3.29	3.67	3.35

③ 視聴前の能動性

グループ 評 定 値	A			B			C			D			E		
	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計
評 定 1					1	1	1		1				2		2
2					4	4	3		3	4	2	6	2		2
3	1	5	6		8	8	6	3	9	7	4	11	7	1	8
4		3	3		12	12	7	1	8	11	1	12	4	2	6
5		1	1		2	2	2		2	2	1	3	2		2
合計人数	1	9	10		27	27	19	4	23	24	8	32	17	3	20
平均評定	3.00	3.56	3.50		3.37	3.37	3.32	3.25	3.30	3.46	3.13	3.38	3.12	3.67	3.20

④ 旺盛な学習活動志向

グループ 評 定 値	A			B			C			D			E		
	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計
評 定 1							1		1				1	1	2
2		1	1		14	14		3	3	8	6	14	4		4
3		5	5		11	11	12	1	13	9	1	10	7		7
4	1	2	3		2	2	4		4	7	1	8	5	2	7
5		1	1				2		2						
合計人数	1	9	10		27	27	19	4	23	24	8	32	17	3	20
平均評定	4.00	3.33	3.40		2.56	2.56	3.32	2.25	3.13	2.96	2.38	2.81	2.94	3.00	2.95

生涯学習におけるテレビ利用態度と視聴能力について 217

「視聴前の能動性」において A グループに次ぐ積極的な態度を示しているものの、他の 4 領域においてはすべて下位にランクされている。すなわち、学習グループにおける学習活動の密度は、テレビ利用態度にもそのまま反映しているというわけである。

⑤ 視聴後の応用志向

グループ 評価値	A			B			C			D			E		
	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計
評価 1							1		1						
2				5	5					1	1	2	1	1	2
3		3	3	10	10		3	3	6	13	2	15	9		9
4	1	4	5		12	12	12	1	13	9	5	14	5	2	7
5		2	2				3		3	1		1	2		2
合計人数	1	9	10		27	27	19	4	23	24	8	32	17	3	20
平均評価	4.00	3.89	3.90		3.26	3.26	3.84	3.25	3.74	3.42	3.50	3.44	3.47	3.33	3.45

⑥ 視聴中の能動性

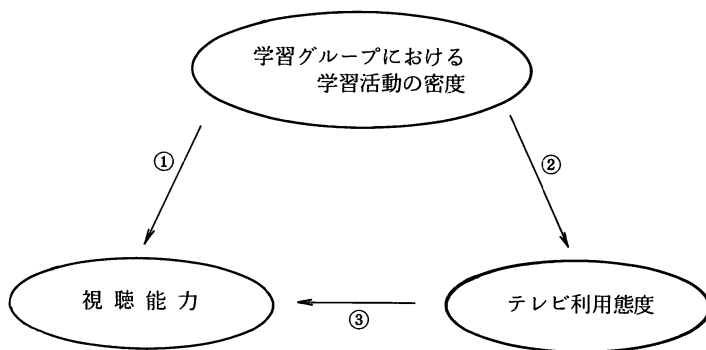
グループ 評価値	A			B			C			D			E		
	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計	参 加	不 参 加	計
評価 1							1		1						
2				3	3		3	2	5	6	2	8	1		1
3		2	2	19	19		5	2	7	11	5	16	15	1	16
4		7	7	5	5		7		7	7	1	8	1	2	3
5	1		1				3		3						
合計人数	1	9	10		27	27	19	4	23	24	8	32	17	3	20
平均評価	5.00	3.78	3.90		3.07	3.07	3.42	2.50	3.26	3.04	2.88	3.00	3.00	3.67	3.10

3. テレビ利用態度と視聴能力

(一) 積極的利用態度と視聴能力

これまでの考察から明らかになったことを簡単に図示すると、第 1 図のようになる。すなわち、①学習グループにおける学習活動の密度（グループの歴史の長さ多彩な学習活動）は、成人のテレビ視聴能力を規定する要因となって働く。そして、それはまた、②成人の積極的なテレビ利用態度を培う要因ともなる。しかも、視聴能力と積極的なテレビ利用態度との間にも関連性がうかがえることから、③積極的なテレビ利用態度は、視聴能力を規定する要因の一つであることが予想される。

第1図 視聴能力の規定要因



ここで、③について、学習グループの歴史が最も長いEグループをとりあげ、さらに突っこんで考察してみる。第5表は、テレビ利用態度の各領域と視聴能力の各因子との相関を、Eグループについてみたものである。表で*印を付した部分にそれぞれ相関が認められる。すなわち、

- (1) 学習媒体志向と構造的理解因子 (0.5745)
- (2) 視聴前の能動性と表現性因子 (0.4990)
- (3) 旺盛な学習活動志向と構造的理解因子 (0.5958)
- (4) 旺盛な学習活動志向と表現性因子 (0.4521)
- (5) 旺盛な学習活動志向と視聴能力の総合 (0.5122)
- (6) 視聴後の応用志向と構造的理解因子 (0.4325)
- (7) 視聴後の応用志向と視聴能力の総合 (0.4300)
- (8) 視聴中の能動性と構造的理解因子 (0.5651)
- (9) 視聴後の能動性と表現性因子 (0.4952)
- (10) 視聴中の能動性と視聴能力の総合 (0.4898)
- (11) 利用態度の総合と構造的理解因子 (0.7091)
- (12) 利用態度の総合と表現性因子 (0.6074)
- (13) 利用態度の総合と視聴能力の総合 (0.6454)

以上Eグループについて言えば、テレビ利用態度と視聴能力との間に明らかに相関が認められる〔上記(13)〕ばかりか、両者の細部にわたる相関〔(1)~(12)〕が認められる。とりわけ、旺盛な学習活動志向と視聴後の応用志向が視聴能力の総合と相関をもっていることは、注目に値する。視聴能力を育てるための戦略的なヒ

第5表 テレビ利用態度と視聴能力との相関（Eグループ）

態度 1	平均	10.85	標準偏差	1.931	能力 1	平均	22.80	標準偏差	2.993	人数	20	相関係数	* 0.5745
態度 1	平均	10.85	標準偏差	1.931	能力 2	平均	13.25	標準偏差	2.791	人数	20	相関係数	0.2946
態度 1	平均	10.85	標準偏差	1.931	能力 3	平均	11.70	標準偏差	2.147	人数	20	相関係数	0.0615
態度 1	平均	10.85	標準偏差	1.931	能力 4	平均	4.60	標準偏差	1.855	人数	20	相関係数	- 0.1843
態度 1	平均	10.85	標準偏差	1.931	能力 5	平均	52.35	標準偏差	5.994	人数	20	相関係数	0.3891
態度 2	平均	7.10	標準偏差	1.921	能力 1	平均	22.80	標準偏差	2.993	人数	20	相関係数	0.2296
態度 2	平均	7.10	標準偏差	1.921	能力 2	平均	13.25	標準偏差	2.791	人数	20	相関係数	* 0.4990
態度 2	平均	7.10	標準偏差	1.921	能力 3	平均	11.70	標準偏差	2.147	人数	20	相関係数	- 0.0291
態度 2	平均	7.10	標準偏差	1.921	能力 4	平均	4.60	標準偏差	1.855	人数	20	相関係数	0.1656
態度 2	平均	7.10	標準偏差	1.921	能力 5	平均	52.35	標準偏差	5.994	人数	20	相関係数	0.3878
態度 3	平均	13.05	標準偏差	3.398	能力 1	平均	22.80	標準偏差	2.993	人数	20	相関係数	* 0.5958
態度 3	平均	13.05	標準偏差	3.398	能力 2	平均	13.25	標準偏差	2.791	人数	20	相関係数	* 0.4521
態度 3	平均	13.05	標準偏差	3.398	能力 3	平均	11.70	標準偏差	2.147	人数	20	相関係数	0.0295
態度 3	平均	13.05	標準偏差	3.398	能力 4	平均	4.60	標準偏差	1.855	人数	20	相関係数	- 0.0206
態度 3	平均	13.05	標準偏差	3.398	能力 5	平均	52.35	標準偏差	5.994	人数	20	相関係数	* 0.5122
態度 4	平均	11.50	標準偏差	2.086	能力 1	平均	22.80	標準偏差	2.993	人数	20	相関係数	* 0.4325
態度 4	平均	11.50	標準偏差	2.086	能力 2	平均	13.25	標準偏差	2.791	人数	20	相関係数	0.3565
態度 4	平均	11.50	標準偏差	2.086	能力 3	平均	11.70	標準偏差	2.147	人数	20	相関係数	0.3238
態度 4	平均	11.50	標準偏差	2.086	能力 4	平均	4.60	標準偏差	1.855	人数	20	相関係数	- 0.2197
態度 4	平均	11.50	標準偏差	2.086	能力 5	平均	52.35	標準偏差	5.994	人数	20	相関係数	* 0.4300
態度 5	平均	17.10	標準偏差	2.406	能力 1	平均	22.80	標準偏差	2.993	人数	20	相関係数	* 0.5651
態度 5	平均	17.10	標準偏差	2.406	能力 2	平均	13.25	標準偏差	2.791	人数	20	相関係数	* 0.4952
態度 5	平均	17.10	標準偏差	2.406	能力 3	平均	11.70	標準偏差	2.147	人数	20	相関係数	0.1413
態度 5	平均	17.10	標準偏差	2.406	能力 4	平均	4.60	標準偏差	1.855	人数	20	相関係数	- 0.2375
態度 5	平均	17.10	標準偏差	2.406	能力 5	平均	52.35	標準偏差	5.994	人数	20	相関係数	* 0.4898
態度 6	平均	59.60	標準偏差	8.230	能力 1	平均	22.80	標準偏差	2.993	人数	20	相関係数	* 0.7091
態度 6	平均	59.60	標準偏差	8.230	能力 2	平均	13.25	標準偏差	2.791	人数	20	相関係数	* 0.6074
態度 6	平均	59.60	標準偏差	8.230	能力 3	平均	11.70	標準偏差	2.147	人数	20	相関係数	0.1432
態度 6	平均	59.60	標準偏差	8.230	能力 4	平均	4.60	標準偏差	1.855	人数	20	相関係数	- 0.1382
態度 6	平均	59.60	標準偏差	8.230	能力 5	平均	52.35	標準偏差	5.994	人数	20	相関係数	* 0.6454

注： 態度 1（学習媒体志向）

- “ 2（視聴前の能動性）
- “ 3（旺盛な学習活動志向）
- “ 4（視聴後の応用志向）
- “ 5（視聴中の能動性）
- “ 6（総合）

能力 1（構造的理解因子）

- “ 2（表現性因子）
- “ 3（学習意欲因子）
- “ 4（番組批判的因子）
- “ 5（総合）

ントの一つが、そこに隠されているからである。つまり、日常のテレビ接触のなかで、旺盛な学習活動を志向し、またそこで学んだことを視聴後に応用していく態度をいかに育てるかが、視聴能力を高めるための大きなポイントの一つとなる。もっとも、このことは、Eグループについてのみ実証的に言えることであるから、それを全グループに一般化することには少し無理があるかも知れない。だが、それは、少なくとも視聴能力育成の手だてを探るに際して、一つの有効な切り口を暗示していることはまちがいないであろう。

(二) 課題と展望

最後に、これまでの考察から得た知見をもとに、視聴能力を高めるための一般的な方途について若干の提案をおこない、あわせて小論の限界と今後の研究課題について触れておきたい。

視聴能力を高めるための方途は、間接的なレベルと直接的なレベルの二つの方向から考えることができる。

まず、間接的なレベルについて言えば、学習グループにおける学習会の展開に工夫を凝らすことである。とくに、日常のテレビ利用態度の変容を迫るような学習会をどのように創り出し進めていくか。たとえば、テレビと他の媒体との併用、メモを取りながら問題を整理し仲間に報告すること、仲間の考えと自分の考えとの異同にとくに気を配ること、学習事項を応用する習慣を身につけ、その成果を学習会に持ち寄ること、など学習者の日常のテレビ利用態度に深くかかわる事柄を、学習者の学習活動の中にふんだんに盛り込むことである。こうして、学習者一人ひとりのテレビ利用態度を変革していくことが、彼らの視聴能力を間接的に高めることにつながる。

次に、やや直接的なレベルで言えば、視聴能力にかかわるテレビ視聴のあり方を、少しずつ訓練していくことである。その際、先の視聴能力の4つの因子にぜひ着目してみたい。映像によるテレビ情報を構造的に理解する習慣を培うこと。そのために、画面や場面の移り変わりに気をつけたり、映像の段落に注意を向けたりすることが、共同視聴の中でとくに重要になる。また、情報の単なる受容に止まらず表現にも目を向けること、番組の作られ方に関心をよせ、番組を批判的に見ること、さらに、番組の進行を前もって予想するといった作業を重ねることで、視聴能力はより鋭いものへと変わっていくであろう。

いずれにせよ、視聴能力は、こうした意図的な学習活動とそれへの援助を通して大きく育つ。この点で、視聴能力の測定尺度とテレビ利用態度の測定尺度は、これまでの社会教育関係者がどちらかと言えば見落していた「視聴能力の育成」

という教育領域に、新たな切り口を提供するはずである。

さて、小論にもいくつかの限界がある。その第一は、ここで使用した視聴能力の測定尺度は、あくまでも小・中学生用に作成されたものである。それは、成人用としても十分通用し得るとは言え、とりわけ成人が学習用に利用する番組を想定して作成されている訳ではない。この点を考慮しての尺度の改良が、今後の課題として残されている。また、テレビ利用態度の測定尺度についても、因子分析をおこなっての項目の確定作業が必要である。

第二に、調査対象となった学習グループの細密な分析も必要である。たとえば、学習会に参加しての参与観察などが考えられる。学習グループ内の相互作用を分析することによって、視聴能力に働く要因を多面的に摘出することができるからである。とくに小論では、Cグループが常に例外的な結果を示していることもあり、計量的評価を補う質的データの収集がとりわけ望まれる。

第三に、このこととかかわって、学習グループの運営や学習展開を評価する一般的な評価法の確立が、小論の延長線上にある重要な研究課題と言えるだろう。

〔注〕

- (1) NHKの調査によると、昭和60年現在で、そのような学級や講座および自主グループなど各放送利用学習事業は、全国で約5526事業、40万1750人が参加したという。詳しくは、NHK事業部『社会教育における放送利用の現況』1985年7月、を参照。
- (2) 日本社会教育学会放送利用研究会「社会教育における放送利用」（放送文化基金による研究報告書）1977年。
- (3) 本家正文『社会教育における放送利用学習』日本映画教育協会、1977年、放送利用社会教育研究会編『テレビで学ぶ』日本放送教育協会、1979年など。
- (4) 片岡徳雄、住岡英毅『見る・集まる・学ぶ——テレビ学習から地域づくりへ——』日本放送出版協会、1981年
- (5) 中井正一「映画のもつ文法」久野収編『中井正一全集3、現代芸術の空間』美術出版社、1964年、207ページでは、映像のもつこのような特性が鮮やかに分析されている。
- (6) 高旗正人、千原孝司「テレビ視聴能力形成度の測定——因子分析法による測度作成の試み——」メディア教育研究会『映像の評価とメディア教育』（放送文化基金による研究、中間報告）1984年、pp.7～32
- (7) 水越敏行編著『視聴能力の形成と評価』（放送教育叢書7）日本放送教育協会、1981年、pp.23～27

222 自由投稿

- (8) 押野市男「視聴能力形成のための領域と視点」水越敏行編著，上掲書 p.212
- (9) たとえば，TV 番組の内容をどの程度理解しているかを内容的に明らかにするテストを作成し，そのテスト結果とそれぞれの個人の視聴能力テストの得点を比較検討するなど。高旗正人，千原孝司，上掲論文，メディア教育研究会，上掲書 p.31
- (10) このグループの学習活動については，「放送教育・臨時号」第40巻第9号，日本放送教育協会，1985年，pp.71～75に詳しい。
- (11) このグループの学習活動については，片岡徳雄，住岡英毅，上掲書，pp.48～55に詳しく報告されている。
- (12) たとえば，テレビ世代とは異なる高齢者が半数近くを占めている点も，見のがすことのできない要因の一つではないか。
- (13) 全般的に，人びとは彼らの既存の態度と関心とに一致したマス・コミュニケーションに接触する傾向がある（J. T.クラッパ，NHK 放送学研究室訳『マス・コミュニケーションの効果』日本放送出版協会，1966年，p.37）

付記

本研究は，昭和59年度と60年度後期，放送文化基金の助成による共同研究「映像の評価とメディア教育」及び「メディア教育のカリキュラム開発と評価」（研究代表：大阪大学，水越敏行）の一環としておこなったものである。